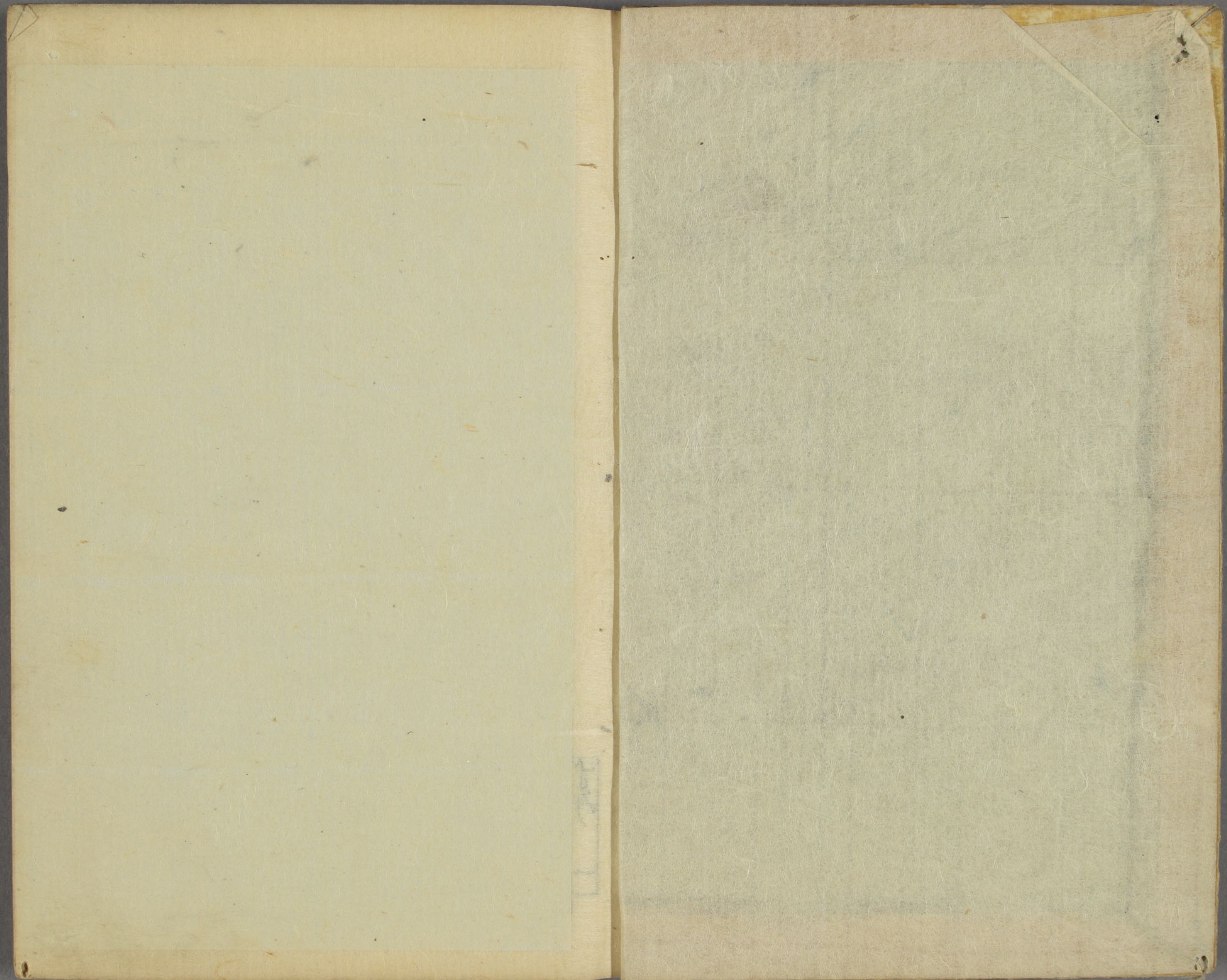


景

倭

e





炭俵

信濃何九撰釋

瓦の窓をひらき心の泉を汲

一書云云僅相如る云朝因瓦窓夕汲心泉

一書云云莊子曰原憲居魯環堵之室茨以

生草蓬戸不完棗以為樞而甕牖室褐以

為塞

十ありの七の文字の形風

愚考形風を俗語を卑下していふ

詞あり朝燈とほつきて朝を朝燈の

義あり郊外の義あり

宋人の不龜らばといふ義

愚考火桶ふけし炭をたこすを不龜の

詞より火といふ義を宋家の句より在炉

邊を不龜夫此古事を莊子曰宋人有

不龜者其方以孫不龜統為軍容

字之誤也其方百金聚族而謀曰我世

為孫不龜統不龜數金今一物而鬻投百金

與之客為之以說吳王越有難吳王使

之將冬子越人一水哉大敗越人裂地

封之能不龜乎一也或以封或不龜於

孫不龜統則用之矣也

一書云云孫不龜統の同音のめ

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

一書云云孫不龜統の詞のめありのめありのめあり

やまゝの深山のやまゝのめきなとるりめつる
ねむの増大

独ちちりてを小字字をりて略
歌号中の記しをひりけり

愚考の翁の独云を曾てそ連を歌号と
す別教のり歌号歌編よ合せて見一
梅り魚よの法と月の出る山路のま

古注よ俗考の歌るより白中よ考の
字もるる事とそ長なりの考り一
おをや歌略の法とやり一き杜南の兼
菴の信よ暫時電載花幾如葉沉波
又林和靖の梅の信よ横斜疎歌水淡
涼暗魚浮初月黄昏の信よそ歌を
いろりて吟ありそ連とあり一
是歌略

の法あり 愚考翁歌傍歌とりよも歌
略の法とそめ何そや歌略互歌とを祖
翁の白よ郭公正月を梅のらなとるり
そるふとそきすの白あり白意を郭公を
る考ぬそ正月梅の咲る時を考り時ふ
い方外花々咲るよるりなをとるり物
しやとこつるすふとそきすそ連きるる
まハ梅よ外花正月よ日月と皆その時其
の系物をとりけり合とそり時をよ考
れ歌を略し梅よ外花を歌よ略し
るり余考の歌よそ余考を歌とりよそ
やめりそそ家よあしそるりの侍り
歌略とりよ法をり一歌略互歌とあそ
り一そ連歌を略して互よ歌守の法

有りは亦奪胎の法換骨の法と注
す人有りい心ゆてうくまのり
是胎を奪へて骨を換ゆ一奪胎
換骨といひ換字奪胎とて字一換して
然と奪るの法有り錯綜精倒とて
みくむて精倒すといひの法有り
此といひ出すはうらられり

一書い此の法より通く此袋の法は胎の
曰くより有りかよきこと病を治す
うくまとききまは河海の細流を撰ん
といふ心ありとていふ山むより上と
いふ事よといひる御借の金言あり
康安元年四月九日今曉室町殿
姫君誕生也此袋大敏を庫取と云

愚考後名目云母を袋入るるをらつるの腹
中入るの子童もあつ時の中入るの在めく
よ信まはめてくまのりよとて中身
山崎園抄云俗称人母袋と云蓋胎之義を
取矣又曰豎小女子を袋と云横小女子を包と云
此層小女掛中記 変ていなり
此書をばまふ君人 一めき

一書よ能くく君命をめぐといふる之を君命を合
ふといひる甚奇也 愚考此乃胎之周
意よりまけりて胎の調度をくまのりて
有りその主人え終りて障子引ま入る法を
血氣のま 當日以る一む心所の君命を
置やてくまのり後まを同けしめき
故くく付て 君命のくまを 御術者

くろくしてくろくするなり本説者の虫啄むより
此のくろくするなり
成美曰和漢三才集會
よ曰揚州福壽小磁名雀飯又毛吹草小
雀飯を印射するの飯も食入るる雀の
みくくするなりをりてりて

細しと夥の月の宵の月
一書小深氏友のうらまふ知月の夥の月
おまののあまの衆中略月をさし出あまの
花のいあさるるれもさあふとあすのふ
六月七日あまのうらまをりてりて
あまのうらまの通の夥の月の月とを七日をさす
とあまの

流條をさき流まよのそはらむ
野人曰下地をさうらまのそはらむ流を上を

流まよは上まよはあまのそはらむ一名流條と云
こまよはしこまよはあまのそはらむ
思考の衆とあまの衆をさすの衆のそはらむ
するるのそはらむはあまの衆のそはらむの衆
の衆の貝刻よまよはしとまよはるる衆のそはらむ
網あまのそはらむのそはらむの衆のそはらむ
大節曰ワナキを雷中よ用ゆの昔の衆よ
て製す丸の心ちまよはしとまよはるる
こまよはしとあまの衆のそはらむのそはらむ

思考のそはらむのそはらむの衆のそはらむ
物を瑞着と和漢三才集會曰和肉必大
保村よまよはしとまよはるる衆のそはらむ
こまよはるるあまのそはらむのそはらむ
こまよはるるあまのそはらむのそはらむ
こまよはるるあまのそはらむのそはらむ

ふけりし形なり

金佛の細き由是をさすりらむ
此のいまいの小事のみなるなり

愚考傳灯録曰才一祖迦婆世尊入滅涅槃
樂如系至双林樹間逝然跏趺佛於金
棺内現双足又曰宝物集小大印匡衡昔切
利天之安居九十日刻赤梅檀而摸金
容今跋提河之滅後二子年治紫磨金
面礼兩足一されハ此の次の事ふいまいの
小事皆よりなる涅槃の傳ふえりらむ
ふへー

空豆の花咲ふなり 麦の縁

愚考大和本字曰近年吳風よりあるゆ
ふ西風よりあるなり其実空ふ

空豆

向ゆふ空豆とりりハ九月をねをみり
日陰或る本下或る田るるははりりて
よく丹のりと云こ

子を裸衣あつて遊て早苗并

子のいささのま 白ふさく

愚考杜子美南京久客耕南田北堂
神卧北窓一帯引老妻乘小艇晴看稚子
浴清紅俱飛蝶蝶之相逐 垂帶芙蓉
本自双若飲蔗漿携新有 况 明瓦无謝
玉為缸又古款 ふあの一 みる夕款抄の
下すふ并 翁あつて遊て女をさすりて
るる眼より一待款のまをえりり
を蓮よりして遊ふ款るる夕款よりして優
ふいささのま 細帯の良材るる蓮も文

教も白き子め連ハまはふさくといふを
くろりのるり子を裸父としたりよそ老
書る井のつらう中よめりてまは禪有り
ト常有り

ちくめきの中よりの孝するふあつ

成美曰きめく何れくの敷うしてみまは
ちいしめくろり一しきうしてまはくめま
すみそよふか又云きりの餅よ小きと
入てお逢ふ竹籠の各目有り 愚考本
又よらめきと留りりはしてあまは盤時ふ
予を定めぬ

松坂やま川ふといり裏通り

成美曰許六南初礼云松坂の矢川とけり
と人の面白りのあるりきお先肩も同一

ハ今を統て只の両ふ有り一りとまは此
初よよりて思連ハその以捨母のありはる
るり一

十二三年の衣裳の 抄 梅

本堂はり一不考とらりし

彦味堂曰糸の衣裳を児の服るり一し
愚考次の台よ本堂をりとりしハ取ふまよ
りて児の服とりしハやきま必糸衣の長公
指るりとの服るり一し糸衣左大糸衣
左中糸衣右中糸衣左小糸衣右小糸衣
既忌控衣山七糸衣の糸よ南曹糸と
りしありきる春日無後と多衣衣衣
とるり糸衣ありりやまはは附 十南曹糸衣
福もるりしと造りしハ必定あり

瘧日とよきつうりせしむ 瘧心
瘧てすけしつうり瘧の年しき
愚乃將お忘曰瘧鬼小不能病巨人故小
仕士瘧ん不病と晋人曰君子を瘧を不
病蜀人瘧瘧を以て奴婢の病と守家
よむのつて次しつうり瘧の瘧ありを瘧を是より
起りの病るり

はまき合のなをいやりよ呼あり
愚乃連合を亭主るりまをいしりけふ
よい出ると附くを瘧の強るり 樂天瘧の瘧
ふ云瘧花紫蒙茸 瘧多を瘧 瘧瘧瘧
謂ぬ款を面ら心害有徐 中略又ぬ奴婢人
綢繆盡を夫奇 邪壞入室夫惑不能
除出の瘧の心ををえて二台の瘧とす

言の月横小負ある 古 柱

まいきの月のあふふあつてい
ひはそりると益するつうり瘧とす
愚乃流塔ふはそいを牛こしりよる大小非
るりまらつていしつうり牛をよよつて
たまきまらるりの小對してしき大の字の代わふ
はりつうりまらつてい牛又をせらるる大をまらつてい
ふ成つ向ふの娘もあつてい小成つ成る梨
枳ゆふよよつてい牛はそいを大と胡蹄とハ
牛をりまらつてい牛を男牛と只一尾ふ人のを
あはれあつて牛と心ぬあつてい全作
附るしつうりまらつてい瘧小負ある
柱を横よ負るを瘧のをを次の仇とす
いき烟々両方ふららゆつて身を瘧ありて

百六十五のりきたり少僧ありしころさきハあつてハ
を^{コト}思^イありしゆ^{コト}少僧の僧あり東
涯の乗楞譚曰宋徽宗帝崇寧中居
養心院遍淨園を^ニ遊^スて困窮の老をす^ル
注昔世よ小讀を^ニ有^シて曰不^レ養^ニ健^ニ見^ニ却^ス
養^ニと^レ思^ハ不^レ管^ニ活^ニ人^ニ只^ニ管^ニ死^ニ尸^トと^レ云^クと^レ思^ハ
死^ニを^レ思^ハつてい^ハし^ハ心^ニ思^ハを^レテ^イと^レ判^ス健^ニ見^ニ
と^レ思^ハ皆^ニを^レ本^ニ終^ニの^レ境^ニ依^ルふ^ニして思^ハを^レてい
と^レす^ルり^テして百年の^レま^ニを^レは^クす^ル一^ニ
と^レして次の^レ寺^ニを^レ死^ニ尸^トと^レ管^スす^ルて孫^ニよ^レ明^ス
ら^レの^レる^リ人^ニあり^テ執^シて云^ク寺^ニと^レ計^スら^レて
ゆ^スむ^ニし^ハき^ニを^レ淨^ニを^レ寺^トと^レす^ルる^ニゆ^ハ何^レ法^ニして曰
淨^ニち^ニを^レ極^ニ末^ニの^レ處^ニあり^テして只^ニま^ニと^レ淨^ニち^ニ
ゆ^スる^ニ一^ニ史^ニ宗^ニと^レ有^ルと^レ云^クの^レハ^ニ三^ニ義^ニあり^テ獨^ニ言^ス

淨慈統攝あり自然を勝ありと^レ純^ニ法^ニ
を^レ考^ルり^テと^レ守^ルを^レ立^ルふ^ニの^レ三^ニ義^ニと^レの^レ一^ニ又^ニ
天台と^レる^ニ天台^ニ山^ニと^レて^レ開^ク宗^ニと^レ有^ルる^ニハ^ニ約^ニ
處^ニの^レ義^ニあり^テま^ニと^レる^ニ密^ニ法^ニの^レ家^ニあり^テゆ^ハ
よ^レ約^ニ法^ニの^レ義^ニあり^テ佛^ニ心^ニと^レる^ニ所^ニ從^ニ所^ニ依^ニを^レ教^ニ
を^レり^テ親^ニ如^ニ何^レ人^ニを^レ我^ニ何^レ人^ニを^レ以^テ心^ニ佛^ニ心^ニ
ゆ^ハて^レ号^スと^レ守^ル又^ニ禪^ニと^レの^レ一^ニ禪^ニを^レ无^ニ心^ニ統^ニ想^ニふ^ニ
して^レ禪^ニの^レゆ^ハり^テ三^ニ遍^ニ俱^ニ舍^ニ律^ニい^ハは^スゆ^ハも
亦^ニ初^ニの^レ法^ニあり^テ淨^ニを^レ極^ニ末^ニの^レ處^ニを^レ立^ルを^レえ
て^レ孫^ニ院^ニの^レ名^ニ号^ニを^レ三^ニ昧^ニす^ルゆ^ハり^テ又^ニ生^ニ起^ニ
の^レ義^ニあり^テ然^レく^レく^レく^レ大^ニ德^ニふ^ニゆ^ハり^テあ^リま^ニ
む^ニ一^ニ中^ニを^レ只^ニ佛^ニ指^ニを^レの^レ一^ニの^レ并^ニ當^ニ來^ニの^レ人^ニ
あ^リて^レい^ハま^ニ心^ニ牛^ニふ^ニあ^リま^ニと^レ云^ク一^ニ
産^ニて^レの^レら^ニと^レ并^ニ一^ニ指^ニ佛^ニ指^ニの^レを^レ根^ニ

愚考のうらむるうらむるをいふたのあり田
家よりして新中なるふゆををまのふた板
をりてを根とて一葉美なるありて田の
て南産の湯とのとす

所を比丘尼の御の巻とよ

愚考の東海なる釜川をふ比丘尼のありていふ
御うらむて旅人の袖をとて伊勢路をゆ偏
多し一葉白浪迎るまはし伴勤ありて

月夜ふのきつけ珠の粒とあり

弦打 龍海 雲 ところふ 梅

一書小弦打處を風の急なり暴風の物ふの
ありては弦たを打振めく多ありをいふあり
愚考のきつけ城を日本よふ千余ありに
計とる紀州の加田ありぬ弦打山の地を

弦打處といふは弦打山を讃岐兵衛の浦の山
ありその山をりしのか田ありむ秋の浦一つけ
吹流りして和歌の浦よりてまはる海雲
を完上とて早揚城と弦打と海雲と日竹
豆のめく附宮せか加田を定しては海を水
平海蓋成るすのりといふ通知のそくこ
きるむよひのいこるをよ起り

太節曰蚕をするをて之を体といふあり二六の

体夕夕の体ヲ十の体あり蚕婦の夜よ二六の

体夕夕と起るといふこと

小書よ小書なる已別なりをいふ然後流

のそくユヒリとるなり

岐王寺の上よありて二六院

漢ノ除夜又々々夕ノ爆竹を鳴らすこと
我後漢ノ時より十五日の節と又言ふも
焼るりのときハ東宮の儀をたてしるやと
よつことむととらる。創りしことむととらる
書云故子日御史有云院ニ院路を築謂之烘
堂又事又後集日烘堂を大勢の節ノ形あり
又不やしとら火哉こかひかりしとら火
火をこしりし疑こ不やしとら火をこしりし
を院ノ形こ不ら火穂平麿の海ノ等を
司りたのこ

節の内引 紙してある 檜 原

五味堂日或僧正の日記よま書ふ花をむと
群はく人の集むをいふ毎年節のけり
大和の檜原より川紙して世茶のせりし

をさつりとりあり 愚考 檜原より七条通大炊
川の西より丹波のありとまは氷菓の檜原よ
て流れるる一

何年善 院 志事しぬ 栢の木

愚考 昔よえくさるるを何年善院といひ達
平を善院といひしより九年 面壁の久しき
よのこしりてうくりしるるの世集るるの
の巻よ氏の節是くさるるあふふくさるる
るよ何年善院を略して何事といひふ事
をよあつる 節日志事しの精を笑

愚考 款氏家訓道書日晦歌 節 哭皆當
有 罪 天 奪 之 算 此 こと 晦 自 不 善 歌 惜
月 終 痛 哭 す り ち 何 事 節 の ち 蘇 日 一
文よ月生をたすむ 節をむとえよふして晦日

彦歌新のふ悲しむる鬼神の悪所なき
あの新のふふといひしりる志守る素齋英金
るるのふゆあてしよするふくよきこりこ新目る日
せの若目るるを精を著るる氣ううりしと
うむし果るるのふのそら
成美曰契仲云云云云云云云云云云云
云屈のう子の音を和後うるさひつるこ
愚者一本うむちと書るる非るるうみうむ
しうむさりの路同く美ありさりの物しこ
むしの新子こひるるる年申さる必雨を前
あこひるる十二日新ふ壬の子よ入亥の日あ
うららの成辰午也又書のり日十二月のうら
旨のり日をえてひるるとりし

遠葉よけりや伴物の新あより

古注曰新又古はの物りうもある伴物
とゆるるえ目の式の今板るる新代を
もひ出て後守るるやと道祖神のんや胸中
をささるるしとあるる海の新とや先師
のあるるよ海の新あるるる今目神の
うらうししきあるるるを思ひ出て慈徳和尚
の新よとより新の一字を吟し法隆の
うらうししきを遠葉よ對して結ひるるる
慈音新よあるるるを伴物よあるる人と
はまして後うあるるる花柑子りあ
みらのくのくう関慈む箱の海花

五味堂曰仙基金苑山の禁より 正月十五日

天子一云尺の海志を貢すと云て 杖事曰
後接遠糸よ何れ子路の各古昔の関を
何れものをいりそり善の越て美はらむ

善や後へ丹波の鹿の角のとて
一書よ平家御後よきやうのふる鹿をよよ
この成かしのよひひ世のふよ愛よるひひ
子の海きよふ心とてちりすの鹿を丹波
一越え世のふにきくちりすの鹿を丹波
丹波の鹿をちりすの鹿を丹波
いそりよき善を善の ちりすの鹿

五味堂曰このきくちりすの鹿を丹波の鹿
ちりすと云く 成美曰成美紙よ田舎装束の
ちりすと云く 柳の小袴衣をちりすの鹿を丹波
愚考の柳袴のちりすと云く 一善の字の解を

袴と云けぬるり者を奴隷下郎の比喻と
変比を彼をりて此よ状寸蠢斯縁衣の敷
来子曰引物為説者ことと云いやき下郎
よ比しよるるり 表衣をりもの柳の袴を
引けりいそりよよちりすの鹿を丹波
勤のよるるり 柳の袴のちりすの鹿を丹波
よ柳の装束のちりすの鹿を丹波
資道付物記曰柳衣者母の胎内よ密し
血中よ往五位を越て出現かて佛法終
けよ越く父母の慧をを報し 虎をを
利益せむとすゆふ血相をを表して系
色よ漆ををりるり花者の比喩
白くききききを者のちりすの鹿を丹波
よき家や者よるるり入資戸の粟菜畑

よ花見え歌なる者不是皆下所奴隸の
比喩有りとはあるべし

喰はけや木音の自らの枝抱
愚考の本音の枝の多きいふこそよりの遊り
あせし一方ありとあや

程いさき連門徒坊うの氷後也

いさき連門徒坊うの氷後也

愚考のいさき連門徒坊うの氷後也

イトムイサエイクサ 等あり 活法曰性之勇

急也

神田歌歌 莖まるとはち連したる

一書よまきの花のくくるとはちと好くそを
初の妹よはちまきこやもむ

梅一本はちまきこやもむ

五味堂曰はちまきこやもむ

ちまきこやもむこの枝をまきけ葉をこきりて

依り本音をすりまきの心はくは梅を

法本よまきのこやもむの枝く屈曲あり

お梅を娘すすり法音のたが

一書よまきのこやもむの空うらげく落る梅の

ひらきやまきのこやもむの心はくは梅を

めくよまきのこやもむの法音をひらきこやもむ

うはちくうりのちり小娘のちりまきこやもむ

とらまきのこやもむの梅の部

一書よまきのこやもむの梅の部

とらまきのこやもむの梅の部

唐土のちりまきこやもむ

大京や情の出てあふおろる月

愚考 後拾遺集よふとて會てや月さうの
やむ大京やおろるの法あるき急はくりの
大京を北山さうの

愚考 一ふさうの文

愚考 匠杖集よふさうの文とてさうや
さうふふと云く

愚考の一さうの文をいふさう

愚考 社子美便さうの文とて大丁寧

五人技持てたてたてし柳うま

愚考 夫木集山里をさうさうのさうの
垣技持する人もさうさうのさうの
兼の白ふ咲くさうの花や飯米五十石思ふ
よ芒垣を技持する人もさうさうのさうの

と述懐し柳の五人技持位の人の意を
ようさうの法然よさうのさうの
う又機を極て五石の意陰よ松
枇杷を極てさうの意の花し
群よ此柳を五石米の五をゆりて
柳のを合も心よさうの五をのさう
て五石の機よ又さうのさうのさう
の法然のさう

花雪や白きさうのさうを突合せ

年花曰白氏文集二月五日花如雪五十二人

頭似霜

新めし湯を斤勝やさうの花

愚考 正宗よ曰新花夕月世家と云くさう
さうさうのさうのさうのさうのさうの

いんを

柳の装束ゆすりや花の中
愚考の柳の装束を前より備へて此
げきゆすりを古神曰折花正夜装束やまじハ
心をくらむとの用きこゝろりりし

花母を花よ珠敷くは返さくら

愚考の柳子紙よ中へつまハ齡を老ぬ志ハ
ハあましと花をいへまハもの妙なりけり
此花装束の巻よ獨ある母をすしめて花
のうけい共まじの教の侍りや

常衣よ小川のおりりよ志不干ハ

愚考の古今集よ念々つて吉徳の中 山常よ
ちの細谷川の音のやちやち
まゐるや障の菓つていんを根のり

一書よ花くしとまのなりけり

志のよま花くしと柳の玉あり 愚考の柳の

しめよまゐると五月るとちやちやまじやまじ
ものろまじハそのけちあめんはやうよる花
くろくしとまいりよりのをいへて花の
るま花の長く柳のちよまじをわりのまじハ
自然よそのすくまじのりよしとまのりよる
を道あろまその心ゆま志くぬ族も粗あのと
まゐりていほまのるよまもあまじよまじよ
まおほくまじのりをいりりよも強りまじよ
まのまじよとちよ新衣よまじよとちよあまじよ
ま

柳花やらまじ柳の及ま

一書にま場の昂無とまのりひれり祥徳

よ柳園花時とりよりの出さるるりまを挨
掬のるるをとりよるる盲人よのり〜 愚考
さうりつては慈白の世をまをむむるる運と及
あ〜とりよるる杜律曰隣戸楊
柳弱嬌に恰似十五兒女腰その男山人の
依歌よよもま柳をめぐるるる眉を腰をあり
てまののるるを〜さつて恨るるり運と〜いとんんや
さつて〜のよ依例るるささるるまは〜ぬぬぬ
〜をぬるる〜

悼の歌をやり〜

愚考 悼の歌を法私歌有りゆらるるを繼の
小るるゆりのか

芝山曰

よ柳園花時とりよりの出さるるりまを挨
掬のるるをとりよるる盲人よのり〜 愚考
さうりつては慈白の世をまをむむるる運と及
あ〜とりよるる杜律曰隣戸楊
柳弱嬌に恰似十五兒女腰その男山人の
依歌よよもま柳をめぐるるる眉を腰をあり
てまののるるを〜さつて恨るるり運と〜いとんんや
さつて〜のよ依例るるささるるまは〜ぬぬぬ
〜をぬるる〜

や竹の子藪 一をを於く

一書よ先考病蚕のつりま 白氏文集の依
例よるなりと云く

かときす一二の橋の夜明か

一書よ江戸本亦一ツ目二ツ目の橋を一二の
橋と云ふなり則經尺を一ツ目の橋
某取捨ありと云く 一説よ一二の橋を

流よありその亦その依ありと云く

愚考流よ一の橋二の橋三の橋と申流け
つじさ建ハ一橋のありのそありは実小掛
噴の然くきき三の橋ありのそ目も及ん
流務の系色ありむもの流も亦き守
の系物ありハ流の方流らむよやい流ま
よも橋一ツの念ありありし 来考流まを

さしめよ

亦くこれて葉はみもきくや郭公

古注よ曰人志まぬ大内山の山を本くま
ての舟月をまのりなれ流よよまのり

愚考その兼改の流を五文字の舟よし

てまのりよ白意よ流し人北考ありをえ

やふ愚考時を初郊前の流よくこれ後

撰集よ本くま建てまのりまのり下のか

とまのりまのりありまのりよ小枝う流りま

又大わものこりありまのりまのりまのり

やのりの時を本りまのりまのりまのり

を考の流のまを葉はみ舟の人の本くま

て流りまのりまのりまのりまのり

柳寺よ麦穂い屋一や流り流

成美曰吾儂園原見形立政寺も於十
五石信ふ柳寺と稱す園ヶ系御跡の時
此寺ありて 神君ふ柳を献つて其の
りまふ入しと称す 又の流ふ
百目柳とあり

又の流ふはよから 糶五把

一書ふ母院より定子の旁へ系らるるの
ふ五寸斗の弁擬くす川を弁杖の形に
色みるくして山橋目々け山すけをさうつ
くくくさるるをいふなり 成美曰糶五把
まおろすなりといふるを貞徳ちりき山ありし女住
居居るなりといふくひをさすなりをさすくさるり
政をちりきさしたるの字をさるるなりと
よりのちりきさすなりとさるるなりをさるる

きくくすのたははきやばつたなり
政をちりきさしたるの字をさるるなりと
よりの 愚考貞徳も嘴いほまも 集外三十
六歌仙のよりるまははつたなり

駿河海や ともな柳も葉の白ひ

一書ふ駿河玉海辺川上るるも葉の産物
敷しあり

川中の根本ふよところへ海あり

一書ふよところへよる横柳なるなり

橋や 定家批れありるところ

考の白服息のさくくみして小やうき札こ
右一もたすなりとありしと自由なるなり

のむくや磯葉すくくし語りま

愚考神徳帝ふいつる糶并むらるる愚中の

のきふらげりあり

ふて女ふくしてきつる茶飯の形

愚考 天照太神熊人のきりし取の五穀の穂
を天夜田長田入植ひいしよりの田植の
る女の業ふありのよしよし女とよよ

よふ山や人もすまふあま生らるるみ

愚考 山あまふありを岫山とりふ字本るき
を岫とりふ

竹の子や思の遠くきりうはくしき

成美曰 採氏りの語換留はるのむしあふふ
あふむとてあふうるをほとくあふり
ことほくくふよくとくいあふくしき

新雲を産て活て是やまきしき

愚考 柏玉集よちのやうむりくの家を

こすまはるき藤りり軒のちやあをみむ

明月や不二見ゆりしすりし時

愚考 明月を月と書し子に白の類ふあり
一不二富士不きふ慈愛二婦をいふ思
士者三上山等の天竺あり富士を八葉系
師蘇親著蘇地蘇蘇浅間蘇大日蘇不動蘇
阿弥院蘇釈迦蘇是なり

新く不やあを産あふ寸門の垣

愚考 迹思録曰 聖人三事不誤三時故至
日团团云て帰去来の辞ふ門新後也 国云
新团团の辞ふゆはる又世竟史团团後等
を例かりし

てしりなると新教をりし柿下

一書ふりりなるとりみ五文字の書は徳と

多し 愚考してこの名の書物なるは
一りふくすしむて蔓草の字を
手をつくるるの字をふくむ
助字の字の故に我此先鏡の
字を書てこの字をふくむ
書の法則ありて何やあるや
此の字ふくむるは能字の字
下のほの字をふくむるは
法ありてあるの心をたして
一書ふ鏡の法の麻の字に
恒欣とあり

一書ふ鏡の法の麻の字に
恒欣とあり

匠村集ふ曰山の行下を
匠村集ふ曰山の行下を

ともすうひともいふそのすの通音なり
百善のよ筑波松の脊向あたる足尾山を
つたゆり源徳秘変あたる次弟くのきこ
砥涯洲涯を建ハすうひをすうひの張字
あ又おふすうひといふもふあるなりや
百善のよ字あたる旅ゆくと人をいふ
多うてこの字を麻の漢字を
つたゆり源徳秘変あたる次弟くのきこ
砥涯洲涯を建ハすうひをすうひの張字
あ又おふすうひといふもふあるなりや
百善のよ字あたる旅ゆくと人をいふ

一書に玄城の字を
細浪の波に持せり
女伴の草持を

華うらや鼻の先より流るる

公石曰華物よりの上より下のありの
よして目の前より物をとるは花の
を流るるをいふは花をいふは花の
をいふは花の心をいふは花の
をいふは花の心をいふは花の

愚考りたるは花の心をいふは花の
花をいふは花の心をいふは花の
花をいふは花の心をいふは花の
花をいふは花の心をいふは花の

一奉ふ花物とあるは花の心をいふは花の
花をいふは花の心をいふは花の
花をいふは花の心をいふは花の
花をいふは花の心をいふは花の

愚考り 酉陽雜俎曰柳入七絶あり一
多壽 二多陰 三流多 不似 巢曰木
中不生虫 五雲 葉可 花六 嘉賓七
花葉甚肥 滑堪 以書紙 云云 其書
紙の故るる 鄭度とていふ者 柳葉みで
書をなむむ 柳の葉葉を 葉みして紙
の代りとして 又柳の葉葉を 葉みして紙
柳の本のいふる 葉みして紙 葉みして紙
のいふるを 葉みして紙 葉みして紙
のいふるを 葉みして紙 葉みして紙
のいふるを 葉みして紙 葉みして紙

愚考り 酉陽雜俎曰柳入七絶あり一
多壽 二多陰 三流多 不似 巢曰木
中不生虫 五雲 葉可 花六 嘉賓七
花葉甚肥 滑堪 以書紙 云云 其書
紙の故るる 鄭度とていふ者 柳葉みで
書をなむむ 柳の葉葉を 葉みして紙
の代りとして 又柳の葉葉を 葉みして紙
柳の本のいふる 葉みして紙 葉みして紙
のいふるを 葉みして紙 葉みして紙
のいふるを 葉みして紙 葉みして紙
のいふるを 葉みして紙 葉みして紙

うきものりりる皆⁺一すりて只名
そとぬりの重て親学よりとりりる
もの

才雅曰も魚つらとあつて一賞て只白
不白くめつらとあり

爪元て心やま一やと一あり

愚考舊事本紀曰以手之十箇爪為手
端之吉棄物以是之十箇短爪為是
之棄物是慎収已爪不一手是之爪
之法之元也云々拾芥抄曰丑日除
甲寅日除是甲寅日除日除爪の長
くるりたる目とて爪をハクハク子
の目あり爪きつらとあり親氏要覽曰

爪の長きくを破戒の相あり云々 文珠同經
曰爪詩も一指搔癢故也云々

秋の空尾上の秋ふはるまじり

愚考文選秋興賦云天晃朗以弥高兮
杜牧待小南山与秋色一氣暫兩相
林天の玲瓏と澄のありて言きり
故ふ万木も守らまじりて言きり
の山の尾上ふまじりそらそまじり
て何のしりまの剣りこそまのそり
ていそふまのそり

テアリの 秋の空尾上の秋ふはるまじり
そり
あはけ^{テア}の味^{テア}もや^{テア}向川^{テア}る

陰二十九日在膳脛 三十日在足跌 去々男女
よは日此雨よ針灸す魚くく底骨可
右者のたまむ ありまの
意味堂曰編をよとて和漢を
愚考和撰よんて書つて
解よわんと書が此時代の
是のまを授むとつら白よ必
之のまを授むとつら白よ必

於邊よ往のまを連つて
太節曰往をえよ川中入竹を
をくをよとめとりよその
終を分よて魚の細よ入を
あつこの梅津桂の花の
むりよの子ありよのまを
一書よ後よ梅津よ往よの二首の歌あり

紀家本記よ別をよやくあはひ
咲花の梅津の里のあけをの
もやあつて月のある川流
や花をよつて心をもよ
花のあつて花のあつて
てのあつて花のあつて
ありとよく 愚考よま
ありて花をよ梅あり
又花をよ梅ありとよ
花をよ梅ありとよ
又花のあつて花のあつて
もあつて花のあつて
又花のあつて花のあつて
もあつて花のあつて

と云ふの事して三台女の依老を降定之由
王依日記の傳するを古依日記より正月
二十八日よりの雨やまの次々たる事と云ふ星
さつえんえんといふるをうらうらといふは
表より見合ふといふの事なり 於此不新す

ひつりまきま、跡に軍にたたりし
法氣の吾も難談もをぬ

一書より二十八日の軍を不二の精場にして我
兒方の夜討の傳ありと云ふ 愚考夜討
の解いさゝか見未るなり 二十八日の軍となり
を一向宗の軍と見ての附込あり次の依老
又その心を培つて警の表の軍と云ふ定より
本教寺の軍も大坂之河とうこりきり
淡路の陣を三台女わけて教女教女両上人

と織田勢との合戦ありそまの弁形より雷
を降らるるを二十八日の雨を補ひて表
表と雷といふ附えきみする 誠より云ふき
の事なる法氣の雷ふあらすむといふの
軍と云ふこと一 蕙門の排遣を是等を
手本とす一 古を又何やら巻より新の機
きききり 二十八日の事なる半盗人といふ
まじりや是又二十八日を一向宗の山又ふけ
ありなり

堀より門あり 五十 石

その島の勝鬼も手を掲月と花
法味堂日記ゆゑの傳と云ふ 愚考
ゆゑゆゑの事なり 五十石を云ふを
をゆゑの事なり 後人の説ゆゑを云ふ

とておの進先のみ序文を其角の念目よりして自筆を
を揮ひて下炭俵の虚を補入とる程し文旨のよき
るの後該を以て流のうき手此炭俵のみとてあり
虚といふものありしものありて又流のうき手の
と歌号をいふものありしものありて又流のうき手の
を以て巻改ふべきを以て流のうき手の書にのりて
むとせしものありしものありて又流のうき手の
さるものありしものありて又流のうき手の
巻改ふを以て流のうき手の書にのりて
流のお後ふありしものありて又流のうき手の
の序ふ紙端の集流のうき手の書にのりて
ふ眼を以て流のうき手の書にのりて

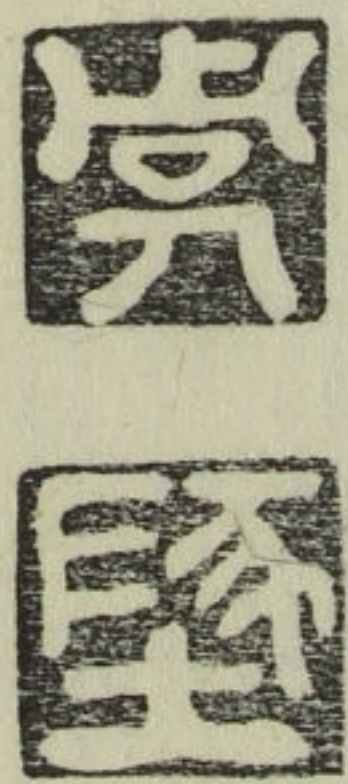
双瓶為鑑以古為鑑以人為鑑
道をちかむもの鑑をすむハ
ある處うらむ馬はあこの如
口み、意門、い、の、ま、つ
七部、の、双、瓶、が、な、ま、の、め、だ

かの酒氏見さしむ教人
すあはるなりお平つうたあ
俳さなる月金入る
朝夕望由すそと解せ
さしむと面み場
まゝなり月院社

由初光の昔よりあつるを
かえりて磨きあけりけ
大鏡識子仙道の土鏡
まじりあひるさるめり
大鏡の前は土鏡なく大
鏡のはみ土鏡あり

かの照階鏡といふは
五つとておれおれ
文政二の物な

友人舟地志る人



子子四十

萬物異名	俳論語	芭蕉翁句解冬考	續猿蓑注解完	七部解大鏡
全十五冊	全二冊	全五冊	完	全八冊

近刻

藥

品

蠹

海

近刻

全八冊

月院社藏梓

七部解大鏡

全八冊

續猿蓑注解

完

再考近刻

七部解小鏡

月院社藏

文政六癸未年十二月

京都書林

京都書林

中立賣堀川東江入

浦井徳右衛門

寺町通二条下几町

野田治兵衛

日本橋通二町目

野田七兵衛

